

福岡市環境審議会循環型社会構築部会議事録

1 日 時 令和8年8月26日（水）10：00～11：30

2 場 所 TKP エルガーラホール 中ホール1
(福岡市中央区天神1丁目4番2号 7階)

3 出席者(敬称略)

福岡市環境審議会循環型社会構築部会委員（7名）

	氏 名	役 職 等
部会長	小 出 秀 雄	西南学院大学 学術研究所長
	阿部 真之助	市議会議員
	大 森 一 馬	市議会議員
	平 由以子	特定非営利活動法人 循環生活研究所 理事
	田中 綾子	福岡大学 名誉教授
	久留 百合子	リエゾンオフィス 代表取締役／消費生活アドバイザー
	森 あやこ	市議会議員

4 会議次第

1 開 会

2 議 題

ごみ減量施策の実施状況等について

3 報 告

プラスチック分別収集開始に向けた進捗状況について

4 閉 会

5 議事録

【事務局】

(資料1について説明)

【委員】

リサイクル率の上昇について、市民の行動変容が反映されたとの説明であったが、地域集団回収や古紙回収ボックスの回収量も踏まえての分析なのか。また、市民と事業者でそれぞれどのような行動変容が見られ、リサイクル率向上に寄与したのか。

【事務局】

地域集団回収と古紙回収ボックス等の回収量を合わせると、令和7年度は14,580トン、令和6年度は15,849トンであり、回収量は減少している。要因としては、ペーパーレス化による新聞等の減少や、少子高齢化に伴う担い手不足により、集団回収の実施団体数が減少していることが考えられる。

【事務局】

事業系については資源物の回収量は増加しており、啓発の結果、リサイクルに結びついているものと考えている。

【委員】

事業系ごみが増加している要因について、オフィスや飲食店など業種ごとの傾向が把握できているのか尋ねる。

また、家庭から回収した廃食用油の活用状況について、回収拠点が30箇所ということだが、実際にバイオディーゼル燃料としてきちんと活用されているのか。バイオディーゼル燃料はあまり馴染みがないため、回収拠点を増設していく際に詳しい説明があるのではないかと尋ねる。

さらに、再生品の購入割合が大きく上昇している要因について、再生品自体が増加したからなのか、啓発効果によるものなのか。

【事務局】

家庭から回収した廃食用油については、令和7年度の回収拠点を30箇所としていたが、その後拡充を進め、現在は41箇所で行っている。回収した廃食用油は全量をバイオディーゼル燃料として資源化し、福岡空港内のJAL車両で活用されている。

引き続き、回収拠点の拡充と市民に対して分かりやすい広報啓発に取り組んでいく。

【事務局】

事業系ごみについては組成分析を行っているものの、増加傾向を業種別に分析するような数値は把握していない。

また、再生品購入割合の上昇については、社会全体で再生品が普及してきたことが主な要因と考えている。

【部会長】

バイオディーゼル燃料を製造する設備が福岡空港内にあるのか尋ねる。

【事務局】

家庭から回収した廃食用油は、市内事業者へ売却し、同事業者がバイオディーゼル燃料へ資源化した後、福岡空港へ納入されている。

【委員】

レジ袋の辞退率 88%という数値について、実感との差があるため、調査方法や質問内容を尋ねる。行動頻度などを把握する設問があれば実態をより把握しやすいのではないかと。

【事務局】

市政アンケートにおいて、「買い物の際にレジ袋を断っている（マイバッグの持参など）」といった設問で把握している。複数年度にわたり 8 割以上の水準で推移していることから、一定程度は実態を反映した数値と考えている。

【部会長】

買い物かごの利用など、マイバッグ以外の選択肢もあるため、その点も含めてアンケートをとると実態に近づくのではないかと。

【委員】

レジ袋削減によって家庭内で使用する小型ビニール袋の購入が増えている可能性があるため、その実態調査を行っているのか尋ねる。

【事務局】

家庭で使用する小型ビニール袋の消費実態については、現時点で具体的な調査は行っていない。

【委員】

ポイ捨てごみや海洋プラスチックごみの増加を懸念しており、一層の啓発を求める。
また、各種指標については前年度比較だけでなく、いかに目標年度に近づけるかである。
さらに、事業系食品廃棄物のうち、手つかず食品がかなり減っており、売れ残りのパン等を自動販売機で販売している事例がある。人件費等は削減できているものの、エネルギー消費と施策の関係をどのように捉えているか尋ねる。

【事務局】

食品ロス削減のためのパンの自動販売機は地下鉄の駅 2 箇所に設置している。電力消費量については把握していないが、一般的な自動販売機と同程度と考えている。パンの自動販売機は好評で、ほぼ完売している状況である。

【委員】

ごみ問題やエネルギー問題は相互に関連しているため、より総合的な視点から施策や調査を進めてほしいと要望する。

【委員】

廃食用油の回収拠点拡大について、需要と供給のバランスや事業継続性を考慮する必要がある。また、リサイクルだけでなく、廃食用油を発生させない取組みなど、リデュースやリユースの推進も重要である。併せて、市の施設での活用など、循環の仕組み全体を構築してほしいと要望する。

【事務局】

福岡空港におけるバイオディーゼル燃料の利用量は、市の回収分だけでは不足しており、他の回収分も合わせて利用されている。市としては、廃食用油の回収と資源化を推進しつつ、広報啓発や回収方法について関係者と連携していく。また、今年の7月に市営渡船での活用も試行的に開始しており、引き続き活用方法を検討していく。

【委員】

事業系の廃食用油も回収しているのか。

【事務局】

市が回収しているのは家庭から排出された廃食用油のみであり、事業系については事業者が処理することとなっている。

【委員】

事業系の廃食用油も、飲食店でかなりの量が出ると思われる。

【事務局】

飲食店から排出される廃食用油は産業廃棄物であり、民間事業者による回収が進んでいる。航空燃料向けの需要が高く、飲食店から積極的に買い取られている状況である。

【委員】

家庭から出る廃食用油についても、より積極的な周知を行った方がよい。

また、回収拠点は市ホームページに掲載されているのか。

【事務局】

随時更新しながら、市ホームページに掲載している。市民の認知度も高くないと思われるため、広報の方法についても工夫していく。

【委員】

事業所から排出された生ごみは一般廃棄物だが、油は産業廃棄物になるのか。

【事務局】

お見込のとおり。

【委員】

学校給食の油もリサイクルしているのか。

【事務局】

リサイクルされており、一部の小学校分は給食センターのボイラー燃料にしていることを把握している。

【部会長】

個人的には雑がみに着目している。

雑がみについては、「雑がみを資源として出せる」という意識自体がまだ低いように感じる。また、リサイクルボックスでは新聞や段ボールは多く出されている一方で、雑が

みの量はまだ少ない状況である。雑がみは専用袋でなくても出せることが十分に認知されていないように感じる。雑がみは、まだ回収量を伸ばせる余地が大きいと考えられるため、ぜひ PR を強化してほしい。

【事務局】

雑がみについては、現在も可燃ごみとして処理されているものが多い。家庭系可燃ごみに含まれる雑がみをリサイクルするため、様々な取組を進めている。特に、子どもたちへの環境教育の一環として「小学校リサイクルチャレンジ」を実施しており、家庭の古紙を学校へ持参してもらい、リサイクルにつなげている。

また、古紙回収のモデル事業にも取り組んでおり、地域集団回収で出されていない古紙について、地域が主体となり古紙回収業者と連携した戸別回収を行うことで、高齢者なども古紙を出しやすい環境づくりを進めており、こうした取組を進めながら、古紙回収量の向上と啓発に取り組んでいきたいと考えている。

【部会長】

「雑がみ」という名称自体があまりよくないのではないかと思う。雑がみに代わるような親しみやすい名称はないものだろうか。全国的にも「雑がみ」という呼び方が一般的なのか。

【事務局】

「雑がみ」という名称が一般的に使用されている。「雑」という言葉に抵抗を感じる方もいるかもしれない。

【部会長】

雑がみと言っても比較的きれいなものが多いため、名称について検討の余地があるのではないかと思う。

【事務局】

「雑がみ」という名称は全国的に使われているものであり、名称変更は難しいが、全国の雑がみ関係団体の中には、「雑がみさま」というキャラクターを作り、「雑がみさま」として子どもたちに親しみを持ってもらいながら、雑がみという名称の普及と回収量の向上に取り組んでいる事例もある。

【委員】

地域集団回収や古紙回収ボックスの利用状況を評価するに当たっては、コロナ禍による地域のつながりの希薄化や、子ども会の組織率の低下なども考慮する必要があると思う。特に地域集団回収の利用率は、2019年には60%を超えていたが、2025年時点では56.2%まで低下している。こうした地域コミュニティ力の低下も要因の一つと考えられるため、環境局だけでなく、市民局などとも連携しながら、幅広い視点で取り組むべきと考える。

【事務局】

(資料2について説明)

【委員】

回収したプラスチックは、全て再生品として活用されるのか。

また、再生品としてハンガーやパレット、引き出しなどが挙げられているが、さらに多様な製品への活用ができないのか。

さらに、ペットボトルはこれまでどおり黄色い袋で回収されることがことだが、プラスチックに混在して排出されることが懸念される。その点について、どのように周知していくのか。

【事務局】

リサイクルが困難なプラスチックは、固形燃料にするなどして活用していくこととしている。

また、製品化については、国においても、再生材の利用拡大や高度マテリアルリサイクルなどの研究が進められており、今後の展開に期待している。

ペットボトルについては、単一素材であるため、ペットボトルからペットボトルへと再生するリサイクルルートが確立している。このため、プラスチックとは分けて回収した方が効率的であり、その旨を住民説明会などで周知している。

【委員】

その点については、しっかり PR していただきたい。

【委員】

スーパーでは白色トレイなどの店頭回収が行われており、素材ごとの回収が進められている。一方で、今回のプラスチックの分別収集では様々なプラスチックを一緒に排出できることから、市民がより簡単な方法を選択し、素材ごとの回収が進まなくなるのではないかと懸念している。

また、プラスチック用指定袋の価格がペットボトル用と同額であることについて、市民の行動への影響も含めてどのように考えているのか。プラスチックの分別収集は有効な取組だと思うが、分別意識の低下につながらないよう配慮が必要ではないか。

【事務局】

プラスチック用指定袋については、回収したプラスチックが資源化できることから、ペットボトル用指定袋と同様に半額としている。

白色トレイについては、住民説明会においてもご意見をいただいているが、これまでどおりスーパーなどの店頭回収を利用いただければ、素材を生かしたりリサイクルにつながる旨を説明している。

今回の分別収集では様々なプラスチックが混在することになるが、再資源化施設において光学選別などを行い、素材ごとに適切なリサイクルにつなげる。まずは市民にリサイクルへ参加してもらいやすい仕組みとすることで、より多くのプラスチックを回収したいと考えている。

【委員】

分別事業者の話では、素材の違いよりも汚れの付着が大きな課題とのことである。プラスチックは軽く洗って排出することになっているが、リサイクル業者の負担軽減やリサイクル品質の確保のためにも、適切な洗浄について指導した方がいいのでは。

【委員】

リサイクルを進めることは重要であるが、発生抑制の考え方についても周知してほしい。

また、気候変動の影響については、将来の問題としてだけではなく、現在の猛暑や豪雨、生態系への影響など身近な問題として伝えることが重要である。出前講座などでは、どのような視点で説明を行っているのか。

【事務局】

住民説明会では、資料に示した気候変動の影響やCO₂削減の必要性について細かく説明している。プラスチック分別収集への理解を深めるためにも、自分事として捉えていただけるよう、身近な事例を用いながら説明している。

【委員】

現在起きている気候変動の影響も踏まえ、今できる取組の必要性を伝えてほしい。
また、環境局には全庁的な意識啓発の役割も期待したい。

【部会長】

住民説明会は始まったばかりであり、今後の取組に期待したい。

また、プラスチック以外のものが混入していた場合、収集業者が警告シールを貼ることになると思うが、その作業に時間を要する恐れがある。収集業者の負担も考慮し、収集する場合と警告シールを貼って取り残す場合の基準やルールをあらかじめ定めておいた方がよい。

【事務局】

収集開始当初は、市民も分別に慣れていないことが想定される。そのため、明らかに不適切な排出を除き、当初から厳格な対応とするのではなく、一定程度の周知・啓発を重視した運用を検討している。

【部会長】

一軒家だと排出者が特定できるが、マンションは排出者の特定が難しいため、運用については慎重な対応をお願いしたい。

【委員】

プラスチック分別を徹底するのであれば、可燃指定袋にプラスチックを入れて排出している方が問題ではないか。プラスチック指定袋は、可燃指定袋の半額であるが、それにもかかわら可燃ごみに入れて排出しているということであり、この人たちに認識を改めていただくようにしなければならない。

また、可燃指定袋にプラスチックを入れて排出している割合が高い地域については、地域に情報提供するなど、継続的な啓発も必要だと考える。